

Love Green Nepal の近年の活動をネパールで調査

堀内みどり

2010年2月9日から2月16日にかけて標記目的のためにネパールにでかけた。

2月8日深夜便（9日0時30分のタイ航空）にて出発し、17日早朝帰国。

9日：Love Green Nepal (LGN) の代表を務めるアミーラ・ダリさんと会談。事前に日程を調整し、カトマンズの訪問期間



住宅建築が進むカトマンズ

を設定したが、ダリさんの予定が急遽変更となり、彼女にお話を伺うことができたのは、この日と16日の午前の2回になった。

前回の訪問（2003年）から現在までの活動内容の変化や今、力を入れている活動についてお話を伺った。今回は、特に女子教育の意義と方向性について質問し、また、地域で活発になっている女性の自立活動とLGNとの関わりについて尋ねた。また、昨年、財団法人海外技術者研修協会（The Association for Overseas Technical Scholarship）が設立50周年を迎えた記念行事の一環として「AOTS 成功事例大会 “Investing in People for a Better World”」を開催し、AOTS 帰国研修生から寄せられた26ヵ国198件の成功事例のうち、厳選されたベスト・プラクティスの各代表（発表者）10名のひとりとなった件についての話も伺った（『朝日新聞』2009年12月19日参照）。

ダリさんは、カトマンズ在住（東大教会ようぼく）。日本留学を経て、1981年にAOTS技術研修に参加。その間に日本社会の平等意識、労働倫理、問題解決手法などから大きな影響を受ける。帰国後日系企業に勤務の傍ら、1991年に設立した



土曜日の集まりに来た生徒たち。立っているのはLGNのスタッフ

NGO「LGN」で、農村開発と女性教育を推進している。

13日には、LGNの現地サイトのひとつである、パンチカルのセンターを

訪問。毎週土曜日に自主的に行われている女子生徒たちの集まりに参加。その後、近くの「Women's Cooperative」の責任者4人と会談した。LGNのスタッフであるサンガット氏が同行してくださり、通訳もしてくださった。また、LGNでインターシップ中の小林舞さんも参加した。女子生徒は、LGNの奨学生で、毎週土曜日（ネパールでは土曜日が休日）に集まっ

ては、いくつかのテーマを出し合い、それについて自分の意見を述べ、それに対してコメントをする集いを行っている。司会者、発表者、発表について意見を言う人、全体を纏める人（chairperson）は毎週交代する。テーマは前の週に予め決めておくものと、その日の話し合いで提案されたものを扱う。この日、私たちが聞いたのは、「学生・生徒とドラッグ」についてだった。1分間のスピーチの後、それを評価するというパターンで進められた。声の大きさや言葉の選び方、話す態度などが評価される。これは、自己表現の訓練であり、女の子が人前で、きちんと話ができるようにすること、女子生徒が自分の自信を構築するためでもあるとされる。

三々五々生徒たちが集まり、この日は試験期間中ということもあって20数名の参加となった。多いときは50名以上になるという。こ



パンチカル地区5村で構成する女性グループの責任者たち

では、コンピュータ教室もある。なお、2003年の時はタイプを教えていた。パンチカルはLGNが当初から力を注いだ植林活動の拠点でもあり、育苗施設であり、近年はコーヒーの苗が盛んに育てられている。その後、この地域の既婚女性が参加する女性組織のリーダーに会って話を聞いた。彼女たちの組織は約8年前に始まり、今は役員15人が中心となって運営する会員約1,700人（5ヵ村）の組織になった。業務の中心は女性への小額ローン（マイクロクレジット）で、入会者は毎月50ルピーか100ルピーの貯金をし、その上で融資を受ける。返済率はほぼ100パーセントで、返済期日に遅れることがあっても、返済ができなくなるということはまずないという。収益で肥料や農薬、米、砂糖などを購入し、会員に売っている。なお、LGNに協力している農家（約300人）は、有機栽培を実践しているので、農薬や肥料は使用していないということだった。この後、バイオガス・プラントを見学。これは2003年に見せてもらったものと同じで、1頭の水牛の糞をもとに、ガス口1コが稼働（5人家族）。プラントの横に人用のトイレが作られていた。

15日にはLGNの事務所と店を見学。パンフレットを貰い、いくつかの報告書、最近力を注いでいるランの花の培養を見せてもらった。

その他、天理教ネパール連絡所参拝、シヴァラトリ（ヒンドゥー教の祭）参加、スワエンブナート寺院見学などを行った。



1月30日に移転奉告祭が行われた天理教ネパール連絡所（パタン市）

伝道研究会「アメリカスの日系宗教」(4)

幡鎌一弘

今回の伝道研究会は、天理参考館の梅谷昭範氏に「天理参考館における天理教海外伝道資料の回顧と展望」と題して、天理参考館の伝道資料の収集・展示について、そのプロセスを振り返るとともに、将来の展望について整理していただいた。

天理参考館での伝道資料の収集が、教祖百年祭の1986年に海外伝道部(当時)の協力の上で始まった経緯と、収集された資料の分類、収集された資料の具体例などを紹介した。

教祖百十年祭には、収集した資料をもとに伝道者資料展を開催した。収集した資料のうち400点を展示し、大規模な再現展示により、資料にリアリティを付与することができた。また、あわせて伝道史を辿るビデオを上映したり、レクチャーシリーズを開催したりして、当事者の言葉によって伝道が語られる機会を設けた。こうした企画展示は、この時に行なわれた日本移民学会の研究会で高く評価された。天理参考館が現在地に移転した際に、常設展示となり、日本人の海外移住全体を視野に入れた展示が試みられた。

最後に、今後の課題がいくつか提示された。一般的な日本人の海外移住史と天理教海外伝道史の間の齟齬(たとえば、日本全体の海外移住熱と布教の連動性)などの問題をどう処理していくのか。他宗教との比較により、天理教の海外伝道を相対化していく必要性。移民史全体というマクロな視点と個人のプライバシーに配慮しつつミクロ的視点のバランスをとること、現実の社会的状況に即した展示(世代交代、在日日系人、政治性)を模索すること、形を持たない言葉や記憶をどのように表現し

ていくか、などである。

以上のような概略のもと、活発な討論が交わされた。なかでも、資料の位置づけ・解釈の問題が一つの焦点となった。たとえば、実際に使っていた現地の鳴物・神具は参考館の伝道資料になりえるが、地元ではそれは自ら作り、日常的に使っているものである。手作りの鳴物は現地ではまとめて製作されて流通した側面があり、それが日本で展示されると伝道の苦勞を示すものになりがちである。

初期の伝道をどのように理解するのか。そもそも伝道資料の収集は先人の「苦勞」を跡付けることが大きな目的となっていて、苦勞を語るものあるいは記憶が重視されており、そのコンセプトに基づいて展示されている。劣悪な生活環境のなかで苦勞したことは事実だろうが、それが現代社会の生活と対比されることで過剰に読み込まれてしまい、苦勞が増幅されてしまう。

また、そもそも教会資料に依拠する以上、教会を中心とした歴史になり、教会の外側にいた人々との関係が漏れ落ちていかざるを得ない。資料選択から記述にいたる歴史の物語り行為の持つ問題が、そのまま伝道史の資料収集と展示の問題点となっているといえるだろう。

天理教の海外伝道は移民となった日本人に対する布教が中心だった。厳密には違いはあるが、それでも実際には日本人の移民史のなかに収まってしまう。布教が移民の枠の中で行われている限り、将来の展望はない。それぞれの地域で現地人による布教を積極的に位置づけ検証・顕彰していくことも必要になるだろう。つまり、それは将来どのような伝道を展開していくかの方針とも密接にかかわっているのである。

新刊案内



辻井正和著『おさしづ用語の新研究』2月26日

本書は、辻井が1986年に出版された天理国際シンポジウム「コスモス・生命・宗教'86」でのプレシンプの報告書から近年に到るまで、「おさしづ」を対象として多角的に分析した論文を集成したものである。

統計学的手法を積極的に取り入れ、おさしづ用語の従来の解釈を一新しようという意欲的なものである。「神一条」や「順序」「理」という、重要な教語が俚上にあげられ、新しい解釈が試みられている。本文247頁。頒価1,000円+税



幡鎌一弘編『近世民衆宗教と旅』法蔵館

本書は2005年度から2007年度におやさと研究所で行っていた宗教研究会「都市と旅」の報告集で、企画を担当した幡鎌を編者として法蔵館から出版した。研究会に参加した8人の論者は、歴史学・民俗学などの手法を用いながら、主に近世社会に展開していた参詣や遊山の旅を取り上げている。旅による宗教思想の革新、宗教の誕生と広がり情報と人が集まり変動する都市的な関係の重要性を論じ、あるいは富士山・身延山への参詣を取り上げている。そのほか、伊勢・水戸における大神楽の性格付け、旅行者を受け入れる地域社会を論じた論考を掲載。318頁。定価5,000円+税
本書は一般の書店でお求めください。

(9頁からの続き)

涙をながしトヨタ社天皇の地位をあきらめたとしても、周りが、彼を天皇の地位にとどめようとするにちがいない。また、戦後の人間天皇・昭和天皇の姿を無意識に演じた効果もある。戦後の復活は、昭和天皇の人間性への回帰からでもあった。トヨタは、擬似天皇制の危機管理に今直面している。そこで、米国公聴会の世界的舞台は、豊田章男社長の人間臭さの表現芸術という解釈もできる。ニューヨークの村山にな博士(アメリカ現代美術史・哲学)の解釈は、「嬉し涙はアメリカでも理解される。だがそのあとに、強さをしめさなくてはいけない。」であった。

“壊れない会社文化”のトヨタとは、その組織の中核に神格化した豊田家しかなく、そこには社長の地位をめぐる社員の権力争いは起こらない。何もない空っぽの中核・中空構造の神秘をめぐる騒げる面白さの世界的渦が巻いた。そのことを世界に知らしめたのが、律儀で素朴、そして節約と勤勉を旨とするトヨタの番頭型重役陣とそのスタッフたちである。彼ら・

彼女らは、日米の国際ブレイン集団やプロフェッショナルらと協働して周到に準備した「豊田家トヨタ社」の連合歌舞伎の台詞と舞台回し役を舞台裏で演じていた。“お見事!”としか言いようがない。

最後に米国議会の公聴会から学ぶことができた日本発の会社文化論の一方を結論にしたい。それは、主役、脇役、悪役の区別なく、総てのプレイヤー／リーダーがそれぞれの「死生観のグローバル信念」(天地人融合の超越的問題解決思考)を貫くアメリカ版『勸進帳』構築への提言である。弁慶、義経、富樫の「勸進帳役者」は総てが死を前提として、総てが主役となり“生きる人間力”を訴えている。トヨタの会社文化とその製品・技術に死から生への“生きている感動”の教科書『勸進帳』を盛り込んでもらいたい。肥大化による官僚化の弊害の死と平行して、死から生への感動を“新しく価値とする”会社文化の路線がトヨタに甦ることを期待したい。(2010年2月26日)

第6回伝道フォーラム「コンゴ伝道における諸活動」開催

森 洋明

2月26日、天理大学研究棟第1会議室を会場に、第6回伝道フォーラム「コンゴ伝道における諸活動」が開催された。

開会のあいさつでは、井上昭夫おやさと研究所長が「コンゴ伝道は天理教の海外伝道史において、想定外の勉強すべき問題点を提示」したことを指摘し、自身のシンガポールでの布教体験を振り返り、布教地での社会的認知を得るために展開された諸活動(医療教育活動や、剣道、柔道、日本語学校、華道、吹奏楽など)の重要性、またそれらを通して「高山」へ人脈が広がることの効果について話した。

第1講は、元ルカク布教所長の谷徹也氏が「コンゴの奥地布教活動について」と題して登壇。首都ブラザビルから車で1日かかるような奥地で、水や電気などがない中、現地の人と生活を共にした体験などを披露。また、言語の問題や社会構造についても言及し、布教現場において、人々の生活の背景にある社会や文化などを認識しておくことがいかに大切であることを語った。さらに、こうした布教伝道に関わっていく人材育成のシステムについても触れ、これからは母校である天理大学と海外部が連携していくことに期待を寄せた。最後に、「布教の最前線では、時には生死にかかわる事項も発生するので、派遣元は四六時中そのことを念頭に置くべきである。当面20～30年くらいのスパンで長期計画を立てて、辛抱強く、かつ着実に推進すべきである。」と結んだ。

第2講は、コンゴブラザビル教会で活発な活動を展開した「憩の家」診療所に、1年間勤務した柳瀬由利子氏が「看護師の体験を通じて」をテーマに発表した。コンゴ医療班第10次隊のメンバーに加わるまでのいきさつや、診療や看護の奉仕活動に従事する中で、さまざまな人たちとのふれ合いなど、コンゴの生活に溶け込んだ思い出を、当時の写真を見ながら語った。また、日常生活の中での教会と医療班とのつながりや、会長交代の様子などを語った。最後に「この貴重な看護体験がその後の

私の看護観を育て、看護師生活を支えてくれたと考えています。コンゴは私の看護活動の原点です。」と締めくくった。

第3講は森が担当し、「地域社会のニーズに応じて」と題して、現在コンゴブラザビル教会で展開されているさまざまな活動を紹介した。夏のこどもおちばがえりの期間に合わせて行われる教会の少年会による「こどもの祭り」、鼓笛やコーラスなどの文化的活動、また「青年の集い」が中心となって行っている養魚やパーキング(夜間の車の管理)活動、また一般に開かれている識字教室など、日本とはさまざまな面で異なる社会における活動の一端を写真や映像を通して紹介した。中でも「婦人の集い」が中心となって始められた託児活動は、2008年には「天理総合教育施設」に発展し、託児から小学校までの教育を担う活動となった。これは、劣悪な条件の公教育しかない国情から、地域住民たちの期待に応える活動でもある。

閉会のあいさつは、フォーラムの後援でもある海外部の永尾教昭次長が行った。同氏はその2日前にコンゴから帰国したところで、現地で諸活動を目の当たりにした上で、「現地教友と協力しながら、諸活動を一層活発に推し進めていきたい」と述べた。

会場では、半世紀にわたるコンゴ伝道の諸活動の写真パネルが展示された。また、現在教会で展開されているコーラス隊のアルバムも紹介された。なお、フォーラムには、コンゴ伝道に関わった人たちや「憩の家」診療所の医療班元スタッフなど、約70名が出席した。



フォーラム会場前のフロアでの写真展

現代社会と天理教(1)

地雷 虐待 格差社会
DV 孤独死
難民 AIDS 老々介護 戦争
核兵器 フルエン 貧困 自殺
CO2 新型インフル 温暖化 砂漠化 南北問題 環境破壊

天理大学 おやさと研究所 平成22年度公開教学講座

世界が大きく激動している今日、私たちの価値観や身の回りの生活もしたいに変化し、いつのまにか多様な価値観が生まれてきました。しかしその価値観は、ややもすると利己的な価値観となって、「我さえ良くば、今さえ良くば」の風潮を拡大・助長する危険性をもたらしています。そのような現代社会の中で、私たちが日々考え行動する拠り所は、常に天理教の教えに基づくことは言うまでもありません。この講座では、「現代社会と天理教」というテーマのもと、2年間にわたって天理教の教えに基づき生き方、行動のあり方を、現代社会における具体的事例の中から考えていきたいと思います。

第1講 4月25日(日)
井上昭夫 「谷底せりあげ」とユートピア

アフガン・アフリカでの「谷底」せり上げの実体験を映像を通して語ります。ユートピアの「高山」を極めた共産・資本主義もいまや地獄相に陥っています。そこで現代宗教のユートピアの有無とその行く末を予測してみたいと思います。

第2講 5月25日(火)
澤井義則 道に道あり

「ちばも鏡なら、世も鏡」。今、私たちは、どのような姿を「世上の鏡」に映し出していく必要があるかについて考えてみます。

第3講 6月25日(金)
堀内みどり 白紙に戻って一より始める

男女共同参画という理念の実現を目指している現代社会で、天理教婦人会設立百年を迎えることの意味を考えてみます。

第4講 8月25日(水)
岡田正彦 情報化社会と「たすけ合い」

ポスト・モダン、後期資本主義、情報化社会などと呼ばれる新たな社会状況のもとで、これから求められる「宗教」のあり方を模索しながら、天理教の教えに基づく人間の生き方の意義について考えていきたいです。

第5講 9月25日(土)
幡鎌一弘 教えの足もとを照らす

温故知新。先人たちは、常に「現代社会」と向き合ってきました。向き合いつつ、教えを磨いていたのです。歴史を振り返ることで、私たちの今を考えます。

第6講 10月25日(月)
澤井義次 生かされて生きる一生の意味論――

中高年層の自殺の増加など、現代社会が抱える諸問題も射程に入れながら、筆者がこれまで探究してきた「生の意味論」を理論的に展開し、現代社会における天理教の教えに基づく人間学の視座を提示したいと考えています。

第7講 11月25日(木)
宮田 元 陽気ぐらしの世界をめざして

いろいろな問題が起こっている中で、現代社会は大きな変化を見せつつあります。このような現代において、「元の理」をてがかりとし、常に変わらぬ教えを広く深く掘り下げつつ、あらためて私たちの生き方を探ります。

場所：天理教道友社 6階ホール

時間：13:00～14:45

* お車での来場はご遠慮下さい。

グローバル天理
第11巻 第4号 (通巻124号)

2010(平成22)年4月1日発行

© Oyasato Institute for the Study of Religion
Tenri University

発行者 井上昭夫
編集発行 天理大学 おやさと研究所
〒632-8510 奈良県天理市杣之内町1050

TEL 0743-63-9080

FAX 0743-63-7255

URL <http://www.tenri-u.ac.jp/oyaken/j-home.htm>

E-mail oyaken@sta.tenri-u.ac.jp

印刷 天理時報社

Printed in Japan